「死の理解」と信仰的倫理

村上定幸

１:科学的アプローチはどこまで可能か

═══定型化・パターン化の危険性═══

全ての人は(肉体の)死を迎える。そしてこの事実に直面した場合、自らに置き換えてみても、その様子を見ていても苦痛そのもののように思える。それで「安楽死」もしくは「自然死」その他の言葉や、死に関する理解も、これらの解決困難に思えるような事態の解決に関わる姿勢や理解として使われるようになった。ここでは直接の課題ではないが自らの死に関しても、やがての日までの不透明感や、予想される苦痛、さらには、やり遂げていない様々な課題からの脱落を思い起こしても、何らかの解決が与えられなければならない事態のように思える。死を受容するにしても拒否するにしてもそうである。

旧約における理解は、日本の神道に似ている。栄える(重い)反対が死で、吹けば飛ぶようになってしまい、何もなくなってしまうのが死であると大まかに言うことができる(Ｑａｌ動詞の Qal がそうである)。

また、キリスト者の間では、「死は平安に満ちた状態への移行」という理解が広がり、ルターの周辺も、彼の死の瞬間がどのように平安なものであったかを示すために心を砕いた。アンセルムスにおいてもそうであった。[1]

またヨーロッパの発送には、単なる肉体が死ぬこと(sterben)と、霊的な死を、相対的な角度から捕らえたい、という考えも現れている。[2]

また「死」とその周辺、「終末医療」や「安楽死と医療」、「ターミナルケア」などといった言葉の内容に一定の理解を持ちたい、という欲求は多くの解説を試みる力となり、現実にそれらの内容を適応させる、という試みにつながっている。[3]

死の否定(自分が死ぬと言うことは当面はない)
死への怒り
条件付き受容(これをしてから死にたい)[4]
・・・・・・・・・・
新しい希望[5]

などといった図式化やダイアグラムを用いた説明がよく見られる。

けれどもこのような心配はないものであろうか？

死はパターン化されるか？

というのがそれである。

子のと胃は大切に思える。この点から出発すべきであるようにも思える。ホスピスは大きな前進であったが、それは決して「死」へのエスカレータを用意することではない、

２:誕生・生・死は神の領域に属することである

なぜなら、創造主は神であるからであり、その中で我々は、<u>それぞれの死</u>と向き

合うのである。片方に片寄れば、非常なプラグマティックな死観に陥ることになるし、科学的アプローチを拒否すると言うことになると、「信仰あるのみ」というこれまた型にはまった、生活を無視した定式化と、死んで行く人への無策をもたらすことになるようである。

キリスト者が死(死の間近い人)と向かい合うとき

私なら何をしてほしいか？について十分に祈り求めたか？

この人は何をしてほしがっているか？

御言葉を間に置き、はなすべきことがはなせているのか？

魂の対話。[6]

また聞かれているのか？　理解されているのか？

私自身は祈っているのか？

その人と共に過ごすために十分な時間を割いているか？

それが大切なことと言う確信があるか？

またその人の苦痛の緩和にそれは役立っているか？

では誰と一緒にいたいと思っているのか？

十分な医学的な処置がその人にあった形で施されているのか？

同じことが、別れとして、残されるものたちにもなされているか？が問われることになる。 そうしないと「絶望に終わらない死」ということにはならない。

様々な配慮が求められるが、日本的な生命観・輪廻観からは、キリストにある解決といえるような歴史的解決はもたらされない。[7] この「キリストにある解決」こそが我々のなすべき目的なのである。

３:キリストにある解決をめざして

kai eipen autw(VAmhn soi legw(shmeron metV emou esh en tw paradeiswA(LUK 23:43において倫理的にもその頂点が示されている。

イエスご自身は「生」の内からご自身が木の上に上げられことに常に目を留めておられた。「死を看取る医学」２回目で、次のように解説されている。

病院の機能は

検査、診断、治療、治癒/不治

治癒ー＞回復

不治ー＞ケア　　苦痛からの解放と、願いの実現　価値ある死の時

ここにある願いの実現とは小さなことでもあったにしろ。その生涯に思いを馳せる、大切なケアであるというのである。

その通りだと思える、けれどもこの段階で、主にある解決が、希望へとつながるものである。という理解は一般には成立しない。そこには聖書理解が、常日頃からの聖書学習が長い教会生活の思い出が必要なのである。

聖書は、主イエスは、死についてなんといっておられたか。死の瞬間ではなく、当面は、死への直面から自由であると思われる日頃から、よく考えておくことが、この最も大切な時を豊かなものとするのである。

マリア・テレサはどうであったかというかというと、あなたはどの信仰において葬儀をしてもらいたいか」と聞き、そのようにしていたというのである。ある者はヒンデュウ今教で、またある者は仏教で、という具合にである。

そこで我々の課題は二つに分かれる。

それぞれの、勿論宗教上の、経験を持って生涯を送っている人にどう死の瞬間に対処しようとするのかがその位置である。伝道がなされていなかったことを悔いても始まらない。イエスが、サマリヤ人の例えにおいて語られたごとく、なされたごとく、何をも条件とせず、且つまた自らは仰者であることの確保、を最高の規範倫理として主は示しておられるのである。

第二は、その人が信仰を持っている場合である。或いはその人が、自分には信仰経験(教会生活の経験)があるのだと思い出すことのできる場合である。けれども、クリスチャンとて、死の恐怖、苦痛からの自己の確立、おそいくる不安から自由で聖化において「完全」などと言うことはなく、共に過ごす者との魂の会話がこのときに必要なのである。

いかほどにまで一生に価値があったことか。

いかなる罪をも主は解決なさるかた、癒されるいること。

死は「終わり」ではないこと。

私は共に御言葉において祈ることができ、そのために時間が割けること。

これらのことに我々が(完璧にではなく)、十分に力を注ぐことができるならば、それが我々が死にゆく人にできることである。

死には一定のパターンがあり、その「マニュアル」を充実完備していこうという、プラグマティックなともいえる把握には是々非々で臨みたいものである。[8]

---

1 例えば『神の乞食』、『聖アンセルムスの生涯』

2 アルフォンス・デーケンス、『死とどう向き合うか』、NHK人間大学、１９９３

3 柏木哲夫、『死を看取る医学』、NHK人間大学、１９９６、などもその一つであろう。

4 ロスによる。

5 『死を看取る医学』では p.116。

6 トゥルナイゼンの言葉。

7 鍋谷、『老いと死を考える』,pp.151-152

8 「統計心理学」の方法を持ち込んでいる一部の「日本臨床心理学会」の立場と、あくまでも、「その人のためのその人の死」を掲げる、「日本社会臨床学会」の存立基盤を比較してみると興味深い。